



小島烏水全集

第十三卷

大修館書店

小島烏水全集 第十三卷 (第十一回配本)

定價九二〇〇圓

昭和五十九年二月二十日印刷

昭和五十九年三月一日發行

著者 小島 烏水

發行者 鈴木 敏夫

印刷者 山田 隆

發行所 株式會社 大修館書店

東京都千代田區神田錦町三一二四

電話〇三(二九四)三三三(代表)

〒一〇一振替(東京)九一四〇五〇四

ISBN 4-469-19093-4

ISBN 4-469-19080-2

(全15巻)

第十三卷 目次

浮世繪と風景畫

序	三
一 浮世繪の蒐集と研究	七
二 世相畫と民衆藝術	三
三 誕生	五
四 入門	元
五 廣重の名	三
六 初期時代	四
七 海景及山嶽景の寫生旅行	三
八 寫生と粉本	七
九 東海道五十三次	九
一〇 木曾街道六十九次	九

一一	江戸名所	六
一二	江戸藝術の保護者	一八
一三	廣重の風景畫とウィツスラアの夜景畫	一八
一四	霧と雨と雪の美術家 付 八景畫集	一九
一五	小藝術	一九
一六	繪本類	一五
一七	浮世繪に於ける風景畫	一〇
一八	廣重風景板畫の特色	二七
一九	廣重板畫年代考	三五
二〇	彫と摺と彩色	三六
二一	浮世繪師としての廣重の位置（廣重、豐國、國芳、三人の關係）	四九
二二	性 行	三七
二三	富士三十六景及名所江戸百景	六〇
二四	旅行日記	六九
二五	死	四

二六 二世三世及四世廣重

三二〇

二七 浮世繪の海外流出

三三一

《附 表》

一 廣重の板畫板本等に用ひたる印章

三三五

二 歌川廣重年譜

三三六

三 一立齋廣重板畫目錄

三三六

第一 錦 繪

三三七

第二 短冊張交扇畫

三三〇

第三 草 雙 紙

三三三

第四 繪本及狂歌本類

三三四

二代廣重板畫目錄

三三七

三代廣重板畫目錄

三六〇

四 廣重作品板元一覽

三六一

卷 後 に

三六六

版畫目次

三六八

浮世繪蒐集おぼえ帳

風景畫に於ける人格

三七三

日本水彩畫會研究所の存亡問題とその獨立

三八一

文部省美術展覽會の水彩畫を獨立の一科となすべし

三八六

附 日本水彩畫會の展覽會に就て

傍觀者として

三九〇

淺井忠氏の遺作「グレの秋」に就きて

三九二

浮世繪蒐集おぼえ帳

三九五

廣重の繪の話

四一〇

江戸の錦繪店

四一三

北齋と廣重の肉筆二大作

四二〇

廣重の東海道五十三次

四二三

浮世繪所藏品の後始末

四二七

外國で見た日本の版畫（通信拔萃）

四三三

廣重晩年の狂歌繪本	四三五
貴族藝術としての浮世畫	四四五
東海道五十三次に描かれた御馬獻上	四五五
司馬江漢の署名につき	四五七
名所江戸百景 赤阪桐畑	四五八
米國桑港博物館の浮世繪	四六〇
メヅガア氏の廣重蒐集品	四六四
浮世繪板畫の複刻品に就て	四六九
初代廣重 立繪二枚繼 雪景山水（木曾に非ず富士川なり）	四七七
保永堂東海道の改作版に就て 附 繪本問屋鶴喜の事	四八二
人物江戸名所	四九七
廣重事蹟考	五〇一
浮世繪と米人の實生活	五〇〇
米國の版畫研究	五二五

日曜文壇

横濱貿易新報と文藝	五三
荒蕪なる文藝の瘠土	五四
一般人に誤解せられたる文藝	五七
昨年の文壇回顧	五四
トルストイの遺稿	五四
太刀山論	五六
帝國劇場所見	五〇
藝術は自然より大なり	五六
若き人々に	五六
感情の解放	五六
色彩に貧弱なる市街	五六
歌舞伎座買収	五七
文藝と繪畫の交叉線	五一

文部省美術展覽會批評

五八五

青年と動搖

五八九

日本アルプス雪中通信

五九三

藝妓と俳優

五九六

浦島塚——市の舊蹟保存に就いて鐵道院に望む

六〇〇

口から出任せの記

六〇五

三の谷の館

六〇九

マアテルリンクとその象徵劇

六一六

言論の衰頹時代

六一八

音樂の心情——藝術家の社會改革事業を論ず

六二三

カーネギー翁を訪ふ

六三五

後期印象派の人々及びその保護者なる貧乏人

六三〇

戲曲的巨人——乃木大將の自殺を論ず

六三七

富士裾野の秋

六四四

日記

六四五

京都だより

六五

若き人々の洋畫展覽會

六五

木曾駒ヶ嶽にて凍死したる人々

六五

悲劇と社會劇

六一

衰へる都市

六一

書翰の一節

六一

夏と風景

六七

廣重「江戸百景」の原板木

六七

青年の無い都市

六三

解題・解説

近藤信行

六九

浮世繪と風景畫

序

『浮世繪と風景畫』と言つても、本書の内容は、浮世繪に於ける風景畫に止めてある、更に詳しく言へば、文化文政以後、明治以前までの、江戸末期時代を輪切りにして、歌川廣重を中心人物としての、浮世繪史であり、且つ風景畫論である、もし大體に互つて、浮世繪を研究しやうとならば、いきほひ明和安永から、天明寛政にかけての黄金時代を主として、説かねばならぬ、然るにそれを避けて、これに赴いた所以は、浮世繪の生存を許された時代の中では、最も私たちに近い時代であるばかりか、光明の山頂よりも、陰暗の谷底に於て、はげしい流轉の姿が見られると共に、その究極するところ、おのづと新しい藝術の斷層を、劈開^{へまかい}するところに、興味を有したからである。

このやうにして、私の仕切つた時代は、明治の維新に推移する際の大段落である點に於て、江戸舊文明の結んだ果實が、地に墜ちるまでに爛熟して、饞^すえた匂ひを發してゐる點に於て、凡てが頽廢の末紀であるところに、その特色が認められる、かゝる時代に、必然の產物として、文藝では市井の詩人、默阿彌の世話物が出で、繪畫では三代目豊國の女繪及び役者繪と、國芳の慘虐なる武者繪が出た、さうしてその中に交つ

て、我が廣重の風景畫が、復活の微光をさし初めた。

彼等は孰れも平俗にして、卑近なるアーチザンである、時代の病弊を一身に敏感して、梢頭のわくら葉のやうに、顫いてゐながらも、麗らかな冬日に欺かれて、其日々の生を苟安してゐる、その頽廢期に特殊な、すさんだ色彩が塗られ、糜爛した神經が、ふるへてゐる點で、是等代表者の製作には、共通した姿が覗はれる、取り分けて豐國及國芳等の作物には、江戸初期時代からの傳統藝術を完成して、この末期時代と共に完體となり、圓數となつてゐるやうに、感ぜられる、故に専ら頽廢期の情調と、特色を代表した方面から、選擇するなら、此二人を主とするのを至當と思ふ、たゞ私が茲に、彼等及びその時代を記述評論しながらも、廣重を主とし、風景畫を旨とした理由は、この頽廢期の顯著な創造は、案外にも女繪役者繪類でなく、風景畫であつたこと、及び北齋と廣重の二人を待つて、それが日本の藝術史上、特殊な位置に推し上げられたこと等で、新しい藝術の斷層が、この方向から發見せられ、次の新しい時代まで、影響を及ぼして、もはや今日の美術、殊に印象を重んずる美術とは、切つても切れぬ濃まやかな血縁を繋いでゐると、私は見たからである。

廣重も亦時代の兒であるから、その作品には、頽廢の病弊と、見苦しい畸形を具へてゐない、とは言はれない、併しながら爛醉した外形には、覺醒しかゝつた内容を裏附けてゐる、彼の力は、その線の細いやうに、小さかつたにしても、彼の心は、その色の淡いやうに、弱かつたとしても、彼は歡樂と榮華の時代から、顔を反けて、永久に若い自然を見つめてゐた、さうして生の歡樂が破れ始めた時の、哀調悲歌を唄うてゐる、

けれども彼を新時代まで、生き残らせたものは、自然との間に融合して、純一の心になったときに、おのづと生れたリズムである、これが彼の造形美術に、美しい線の安排あんぱいとなり、色の諧調となり、形の整齊となつた、さうして海を隔てた西國の藝術に、影響を與へ、反流が逆しまに旋回して、故郷なる本土の岸を流れてゐる、何だか私の耳には、その流れの叫ささやきが、聞えるやうな氣がする。

それはともかく、彼の風景畫は、今のところ一番自分に近く、一番自分に合つてゐる、日本の都會の情味、日本の山川の空氣が、しつくりと胸に來ることをおぼえる、さうして自然に對して、私の要求するやうな融合と統一とが、何等の説明も強請もなくて、受け納められ、生れた土に對する執着と、子供時代からの懐かしさを再現させる。

然るに一方に於て、彼の死後、半世紀ばかりで傳記は不備となり、作品は離散し、彼を知る故老は次第に凋落てうらくしてゆく、素より彼自身を偽はらずに、語るものは、彼の製作品そのものであるにしても、かくの如き状態は、私に不安を感じさせないわけにゆかなかつた、私は物に脅やかされたやうな氣になつて、この本を書いた。

大正三年五月

青葉若葉の山王臺に於て

著者

浮世繪の風景畫家としては、何人も北齋と廣重を推してゐる、北齋に就ては、既に故飯島虛心氏の『葛飾北齋傳』二卷（明治二十六年刊）を始め、西洋での研究書目は、駭^{おど}ろかれるばかり、多數に達してゐる、之に反して廣重の傳記は、本邦では『増補浮世繪類考』以下の書に、僅々一二頁を割愛されてゐるだけで、外人の研究も、二、三の考證論文を除いて、大體に於ては、右の翻譯と、作畫の要もない解説に止まつてゐる、本書の材料收拾に就いては、作品の蒐集は言ふまでもなく、廣重の寺に詣で、過去帳を寫し、武藏野の郊外に遺族を訪ね、廣重に最も關係の深い故老に就いて、當時の話を聞いたりなどしたが、獲るところは幾^{いくばく}何もなく、故飯島氏が「北齋傳」に序して「先づ翁の遺族を訪ふに、その所在分明ならず、去つて翁の墓に到り、寺僧に就き、遺族を問ふに、遺族は既に絶えたりといふ、翁死して僅に四十餘年の今日、その墓前に一炷の烟なし、又翁と交りし故老を訪ふに、故老多くは死して、惟だ某々氏等あるのみ、又翁が嘗て畫本類を畫きて與へたる、各書肆を訪ふに、その書肆今多くは閉店して、唯云々の數店あるのみ」と言はれたことも思ひ當る、尤もこんな風にして、片々たる材料を掻きあつめ、陳列して見たところで、傳記といふ有機體に、何の生命を附與することにもなるまいが、組立ての素材すら、備はつてゐない今日では、何でも取り込みたく、何でも棄てたくないほど、私は貪慾であつたことを言ひ添へて置く。